CO闘争の中から

第五回

ヒザつき合せて語った青年たち

「守る会」はこの中から

CO患者家族の会　松尾ケイコさんの話

松尾ケイコさんはCO患者家族の会副会長として闘かってきたが、このほど役員改選で隈元前会長にかわって会長にえらばれた。一段とむつかしくなったCO闘争を担うと同時に、松尾さんはまた、合唱詩劇〝みいけの闘い〟出演の一員として参加している。松尾さんの立場と意見を率直に語ってもらった。

むつかしくなった闘い

「欠席裁判で会長になされてしまった」という松尾さんは、それでも当面する家族の会の闘いをつぎのように語った。

いままではCO法をつくるということで、全員が一つの目的に向ってまとまって闘ってきました。しかし、いまからはCO患者の中が現職復帰した人、坑外軽作業に配転された人、八十四名の中にはいり治療を継続している人、一時経過観察になって労災補償をうけている人、それから長情傷病給付になっている人、そのほかに九・二八災害によるCO患者と、六つのグループに分れることになります。

だから、今後は一つの行動をおこすにしても、時間的にも、また問題の上でもいろいろな障害がおきてくるだろうと思います。また会員同志の間でも、なかなか気合いが合わないので、ちょっとした感情のもつれがひびくということもでてきます。

いままでは、ある程度押せ押せムードで役員が会員を引っぱってきたという面もたしかにありました。今後は必ずしもそうばかりはいきません。

いまが最悪のとき、運動の方向をハッキリと

いまCO患者家族の中にあるわだかまりを、みんなでハッキリとだし合うことが必要だと思います。

第一のわだかまりは、八十四名がどうなるのだろうかということです。「守る会」は八十四名を守るためにだけ結成されようとしているのではないか……という気持がみんなの中にあります。

停年すぎた人はとくにそう思うのではないでしょうか。また在籍の人でも「戦線整備をして以来、情勢はどうなっているのだ?」という気持になりますが、何もないと心配が先に立ってきます。

第二に、坑外配転になった人たちは、月収が一万五千円から一万六千円くらいにしかならず、極端に生活が苦しくなったことです。病院に行くにも、週二回なのに賃金カットするという。七級適用ということはどうなったのか、ということです。このまま流されない体制だけは作らねばならないと思います。

第三に、一時経過観察になっている人たちが、いつまで労災補償がつづけられるかとの心配もあります。

要するに、闘いの方向がはっきりしない、いまの時期が不安が残って最悪のときだと思います。もう一度、みんなで闘う決意と方針をきめなければいけません。

「守る会」を作るまでは…　青年たちの気持にこたえて

いま私は、合唱詩劇「みいけの闘い」の出演者の一人になっています。家族の会という立場からもまた個人的にも劇に参加すること自体たいへんなことですが、どうせCO闘争はつづけていかねばならないのだから「守る会」ができるまで、石にかじりついても合唱詩劇に参加することはつづけたいと思います。

合唱詩劇に参加して各地をまわっていると「守る会」を作ることがいかに困難かということがよくわかります。しかし、どこへ行っても社青同などの若い人が「生懸命まわってくれるのをみて、感激します。

長崎公演のときと延岡公演のときの二回は、向うで民泊をしました。長崎のときは、長崎造船の第一組合員の家に泊めてもらいましたが、そこの奥さんは社宅の主婦たち三人をさそって見にきてくれたそうです。その奥さんは、ご主人が会社から持って帰った組合の機関紙の片すみに「みいけの闘い」の公演広告がのっているのを公演日の午前中にみつけ、いそいで社宅の中のできるかぎりの人によびかけてみたが、三人しか集まらなかったと残念がっていました。

「どうして組合はもっと積極的に家族にまでよびかけないのか」と残念がっていました。そしてその奥さんとは夜おそくまで交流することができました。

延岡では若い女性の活動家の家に泊めてもらいました。彼女は全逓で毎日夜おそくまで活動をしていますが、ご主人をはやく失くして苦労をかさねてきたお母さんは「あんたが思うほど世間は甘くない」といって、娘の活動にはいつも批判的でした。

民泊した夜は、最初はそのお母さんも「つかれたでしょう、早く寝て下さい」といった調子でしたが、私の主人のこと、私たちのCO闘争のことなど、いろいろと話していたら、お母さんはいつのまにか「今夜は何時までもいいから、もう少しきかせて下さい」というようになり、とうとう「私は自分がこの世の中で一番苦労したと思っていましたが、間違っていたのかもしれない」といいだしました。

翌日は九時に出発でしたが、その日も早くおきてまた話をしました。そして最後には「キョちゃん（娘さんの名前）あんたの活動には、お母さんはじゃまはしない」と語ってくれたと、娘さんが私に知らせてくれました。

「三池のCO患者、遺族を守る会」などは総評や県評の機関で決めてできるものではないと思います。やはり、一人ひとりの気持に訴えていく以外に「守る会」を作ることはできないと思います。

一歩先きに　歩き出す気持

合唱詩劇に出演している青年たちも、大へんな努力をしているようです。公演がつづくときなどは月に十三万くらいしか出勤できなかったなどという人もいます。しかも、職場や組合の支部からはあまりいい顔もされないで…。

それでも、訴えつづけていこうという彼らの気持に、私たち家族も応えていかなければならないと思います。「守る会」を作ることには、三池山元でさえも困難があることはわかります。しかし、組合員や主婦会より一歩先きに、私たち自身がまず歩きださなければならないのだということを、合唱詩劇でまわってみて感じました。

写真上は、街頭でCO問題の真実について、人々に訴える松尾さん。下は誰からも守ってもらえず、中毒が治らないままあきらめながら職場に降りてゆく新労のCO患者の人々。

―提言―

前進のために

三川木村　守

人の生活は常に前進を必要とします。前進のない生活は、営むのに価値のないものといえましょうか。

文字のあるところ、常に前進があります。毎朝配られる商業新聞から、子供たちが喜んで見いる漫画にいたるまで、すべて前進を教えないものはないでしょう。

機関のある処に、その機関に適した会合が持たれます。そしてその機関のそれぞれは、種類に区別があるにせよ、ひとえに前進への道しるべを探し求め、向上への努力を惜しみません。

私たち労働者も明日のよりよき生活のために、職場集会をはじめ大は中央委員会にいたるまで討議の幅が拡大されています。貴重な休養の時間をついやしての会合は有益なものでなければならない。しかし「長いものにはまかれろ」「障らぬ神に祟りなし」などという不用意な言葉がいまなお現存していることも隠せぬ現実であります。それは何を意味するか。そこには他力本願的な悪がしこさしかありません。当座はもうかっているようでも、取り返しのつかない墓穴を掘っていることが往々にしてあるものなのです。また「泣く子にゃ勝てぬ」の言葉があります。これも困りもの。一人が駄々をこねて、自分ひとりの欲望を満たす。ここにも前進はない。

「人の振り見てわが振り直せ」ということがありますが、あんな生き方は? この生き方こそ、と私は思いますが、さて一人ひとりは右のどれに属するでしょうか。

社会は、あらゆる人生のあらゆる知慧をだし合うことによってこそ共存できるもの。一人の価値ある人間は、他の価値ある相手との結合により、家庭という暖かい雰囲気の中で次代の青少年を生育する義務をおのずから兼ね備えるようになる。

自分を知ることはとりもなおさず他をかえり見ることで、そこにより前進が約束される。教育基本法の改悪をはじめ、言論の統制が行なわれようとする現状に、われわれは大きく眼をみひらき、ごまかしの言葉を見抜く。井の中の蛙にだけはなりたくない。文字を通し言葉を通し、幾千万の人々と交流を深め、筋を通そう。筋が通るということは、結び合うことを意味する。前進するためにはそれらの筋の一つをも失ってはならない。

坑木運搬

四山　堀前　春男

おーい
ちょっと待てよ
天井はよかか
ようと見てゆけよ
可愛いいかあちゃんがいる
子どもがいる
まーだ命は惜しかけんね

天盤は乱れて垂たさがる岩
その岩間を縫って滴り落ちる
なまぬるい水
頭からずぶ濡れてただ
キャップランプの光に
助けられながらゆく

へん
そがん気やすう
あっどんが思うごつ
なってたまるか

道は
いつもながらの地獄坑道
その地獄坑道にあいつは
俺を追いやったが
差別支配なんかに負けるもんか

ほうこの坑木は見らんか
なま木もなま木
刺身にしてよかごたるぞ
水は腹一パイ吸うとる
脱水器でしぼらんとでけんぞ

キャップランプにギラギラ
松やにがにじみ出て光る坑木
そいつが
汗まみれ
炭まみれの肩に
いやに喰いこむ

一歩一歩交わしてゆく足
ボキボキと
ほら、腰骨も鳴る
それでも見らんか
どの仲間の顔もほがらかだ
殺されてたまるか
ケガもおことわり
今日も一日
団結と闘いだ